
永遠に

桜井葵

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

永遠に

【Nコード】

N2242G

【作者名】

桜井葵

【あらすじ】

大好きな人との再会。綾と知夏はゴール目指して仲良く駆け出した。「私の好きな人」の続編版

プロローグ（前書き）

これは、「私の好きな人」の続編版です。
なので、そっちを見てからが良いと思います。

プロローグ

声が出ない。

自然と涙が出てくる。

「ち……な……っ」

最後は聞こえないほど小さな声だった。

どんなにこの時を願ったか。

どんなに貴方に会いたかったか。

ゆっくりと私は歩いた。

そんなに高くない身長、

真っ黒の髪、

真っ白な肌、

切れ長の目、

整った顔、
優等生みたいな服装。

美少年は昔と変わらない笑顔で、

「あや。」

「知夏!!」

私は、貴方に抱きついた。

彼の温もりを感じながら私は泣いていた。

「綾、待たせたな。」

彼はそういった。

昔と変わらない笑顔で、

微笑んだ。

いつまで私達は抱き合っていただろう。

知夏は私を力強く抱き締めた。

「あの、君、転校してきたばかりで、綾ちゃんに気安く触れな
いでくれるかな？」

と、1人の男が言った。

「あん？綾ちゃん？」

知夏はそつと私を引き離すと、男に近づいていく。
私は知夏の背中を見つめながら、涙を拭いた。

ドンッ！！

机が倒され、知夏は男の胸倉をつかんだ。

「ちょっと君、止めなさい。」
ベタな感じで先生が止めに入った。

「うっさい！」
そういつて、殴りかかろうとした。

さつきまで知夏に見とれた私も、さすがにやばいと思った。

「知夏、ダメ。」
殴ろうとしている腕をつかんで言った。

「綾、でも……。」
知夏が怒っている理由はきっと私にある。

「私は大丈夫。」
満面の笑みで返した。

「分かった／＼／」

(転校早々に問題を起こさないでくれよお!!!)

私は心の中で知夏に言った。

「で、何でよみがえった？」(光)
光が質問する。

「は？よみがえる？」(知夏)
知夏が質問を質問で返す。

「これは、夢？………いてっ!!!!」(綾)
私は自分の頬をつねった、が痛かった。

「いや、夢じゃない。」(知夏)

「じゃあ、幽霊か？」(光)
光ちゃんはさっきから動揺している。同じく私も。

「人を幽霊とか言うな!!俺、まだ死んでねえーし。」(知夏)

「え！？」

光ちゃんと私の声が重なった。

「はい？ししし死んでないってどういうこと？」（光）

知夏は死んではいなかった？！

「藪^{ぶさ}医者でよ、医者を変えたら助かったんだよ。」（知夏）

「へ？」（綾）

「だけど、しばらく動けなくて・・・、ひと段落してこっちに来たんだよ。」（知夏）

最後は私に言い聞かせるように。

「よ、よかった。」（綾）

私はまた涙が出てきた。

「お、おい泣くなよ。」（知夏）

知夏は私を引き寄せ、抱き締めた。

「はあ・・・。」（光）

光はそっと出て行った。

「綾、愛してるよ。」

あの夜、貴方が何度も言った言葉。

「もう、離さない。」

知夏は私を強く、強く、抱き締めた。

私は、誓った。

死ぬまで彼の傍にいる事を

幼いプロポーズ

あれから数年の歳月が過ぎた。

そして、私達は高校3年生になろうとしていた。

「綾、行くぞ。」

「あ、うん！」

私達はもう、スタートしていたんだ。
命というゴール目指して。

「荷物、お持ちします。」

「ありがとう。」

私達の周りは昔とほとんど変わっていないかった。

「あつ。」

知夏が私の手を握った。

「行く。」

そういうと知夏は歩き出した。

ねえ、知夏は今、どんな気持ちで私の手を握っているの？

私は心臓が張り裂けそうだよ。

「綾、と藤原くん、おはよう！」

「おはよう！」

唯も私達と同じ高校に進学をしていた。

そして、「城崎 春輝」も・・・。

私達は故郷、東京の高校に進学していた。

「青悪学園高等部」

そう、母校の高等部に。

俺は、綾の手を握りながら思い出していた。

あの日のことを。

「入学おめでとございます。」
中学校の入学式の夜、俺達は誓った。

「今日は、星が綺麗だね。」
「そうだなあ。」

あの日は、とても星が綺麗だった。

でも、俺は星を見ないで彼女を見ていた。
星を見つめる彼女の瞳は輝いていた。

星の白い、淡い、光が彼女をいつそう綺麗に見せていた。

「綾。」
「ん？何？」

「知夏？」

不思議そうに俺を見ている。

俺は心臓が張り裂けそうだった。

「え？」

彼女を力強く抱き締めた。

今までの気持ちを全てぶつけるかのように。

「愛してる。」

「綾、愛してるよ。」

そういって、

彼女の唇と俺の唇をそっとな重ねた。

そして、

ゆっくりと離れた。

「知夏・・・？」

「お前は？俺の事・・・」

「好き。ずっと、」

最後まで言う前に彼女は言った。
綺麗な涙を流しながら。

「俺、綾のこと愛してるけど、付き合うことはできない。お前とはそんな簡単に済ましたくないから。でも、俺達が18歳になったら結婚してくれる？」

自分が沸騰してしまいそうぐらい体が熱くなっているのに気づいた。

鼓動がどんどん速くなっていく。

「うん、待ってる。」

彼女は抱きついて来た。

それがうれしくて・・・。

「ねえ、知夏？聞いてる？」

「あ！！悪い、聞いてなかった。」

「もお！！」

彼女は頬を膨らませていた。

「痛！！」

あまりにも可愛いから頬を突っついてしまった。

「ごめん、つい、可愛いかったら。」

「え！？／＼／＼／＼／＼」

彼女の頬がだんだん赤くなってゆく。

綾、

あと少し待ってろよ！

後少しで、

お前と一緒になることが出来る。

變してると、綾。

幼いプロポーズ(後書き)

評価お願いします。

久しぶりデート<前半>

「だっ大丈夫かな？」

さつきから私は鏡と睨めっこしていた。

なぜ、睨めっこをしているかというところ……

「綾、明日暇？」

「え！？あ、うん暇、だよ？」

「じゃあ、久しぶりにデートしようか。」

知夏の顔を見ると、少し赤くなっていた。

「うん」

というところで、今日は知夏とデート。

やばい！！心臓がバクバクだよぉ

ピンポーン

「はい。」

俺は綾の家のベルを鳴らした。

「お待たせ！！」

そういつて笑顔で出てきた。

白い長めのキャミソール。

キャミの下にはデニムのショートパンツ。

黒い七分袖のカーディガン。

薄いピンクのパンプス。

少々、露出しすぎな気が／／／／

思わず抱き締めたくなってしまった。

しかし、それはおさえて……

さつきから知夏は黙ったまま。変だったかな？

そう思うと急に不安になってきた。

「へっ変かな？」

きつと引きつった笑顔になっている。

「変じゃないよ、すごく綺麗。」

そういつて知夏は私を抱き締めた。

「／／／／」

知夏、私・・・心臓が張り裂けそうだよ。

2人で楽しく話していたら・・・

「あつ！唯だあ、ちよつと行つて来るね。」
彼女がだんだん小さくなっていく。

俺は彼女の背中を見ながら感じていた。

嫌な予感を・・・

「ゆゝい！何してんの？」

「あ、あや！買い物だけど・・・そつちはデートですか？」
唯は冷やかしの目で見ている。

「まあ・・・え！？光ちゃん？」

知夏のほうに目をやると、隣に光ちゃんがいた。

「光くん？」

そのころ、

「知夏じゃん！1人？」

嫌な予感の中！！！！

「2人。」

綾に目を向ける。制服じゃない彼女もやはり目立っていた。

「綾、あれはやべーだろ！」

光を見ると顔が真っ赤だった。何、想像してんだ！お前は！！！！

「光、手ー出すなよ。」

「わーてる。」

かなり怪しい！

「知夏」

俺の彼女、（いや、付き合っではないが……）が手を振って走ってくる。

・・・それはいいのだが、後ろからついてくる天宮はなんだ！？

「綾、可愛い」

俺が声をかける前に光が声を掛けた。そして……

「きゃ、何？光ちゃん！！！！」
抱きつきやがった。

「うっ！ごめん！ごめんてば！！」
俺は、嫉妬してコイツを殴りました。

「知夏、唯が光ちゃんとデートしたいから、Wデートにして欲しいって。」

綾が小声で言った。

その少し困ったような笑顔にやられてしまい、

「おう／＼／」

と、言ってしまった。

「お腹すかない？」

唯が少しkyな言葉を吐いた。

「わあゝ、もう12時？早！！」

と、光ちゃんが騒いでいる。

「知夏、どうする？」

「こっちで食べる。」

私は知夏に手を引かれ、レストランに入った。

「はあく！おいしかった〜！」

「本当、美味しかったね。」

おいしい料理をたべてみんなご機嫌だった。

「ねえ、次、映画いかない？」

唯からの提案に3人は賛成し、映画館に行った。

席は、

知夏・私・光・唯という順に座った。

「綾、腕おいていい？」（光）

「あ、うん」

「疲れたら俺の上においていいから。」

いや、普通おかないでしょ！と心のなかでつぶやいた。

「知夏／／／？」

急に知夏が手を握ってきた。

私達は知夏側で手を握っていた。

強く、強く。

映画も中盤に入ったころ、

私は睡魔に襲われていた。

「綾、眠いなら寝ていいよ、俺の肩で。
知夏は私にしか聞こえない声で言った。」

私は黙って知夏の肩に頭を乗せた。

周りから見ればカップルかな？

と、思っただけで私は一人顔を赤くしていた。

映画が終わって外に出ると、日が沈みかけていた。

「きれい。」

綾は目を輝かせて夕焼け空を見ていた。

彼女はこういう風景が大好き。

さすが、女の子。

「あ、ポップコーンなくなっちゃった。」

「……。」

天宮、ムード壊さないでくれよ。

「太陽が沈んで月が顔をだすでしょ、そしてまた月が消えて、太陽が顔を出す。月と太陽は助け会ってるんだよね、なんだか人みたんじゃない?」

普段見せる色っぽい笑顔の中に時より見せる無邪気な笑顔は、たまらない。

そんな彼女の笑顔に俺の胸を締め付けられる。

久しぶりデート＜前半＞（後書き）

評価宜しく願います。

久しぶりデート<後半>

「悪いが、次から行くところは綾と2人で行きたいから、帰ってくれ。」

知夏は真剣な顔で言っていた。

「分かった。」（光）

「またね、綾！」（唯）

「うん、またね。」（綾）

俺は2人が帰るのを見て、綾の手を握り、歩いた。

握っている手に力がある。

彼女を放したくなくて……。

「着いた。」

「わあ〜きれーい」

やはり彼女の目は輝いていた。

映画館から少し歩いたところに、海が見える場所がある。ちょうど今の時間帯だと、夕日が沈むところが見える。

俺の心臓はピークにきていた。

今にも爆発してしまいそうなくらいときどきしていた。

「綾、今日、楽しかった？」

海を見ている彼女の目を覗き込んで聞いた。

「うん」

(きたよ！無邪気な笑顔！！)
そう思った。

「俺は、綾と2人がよかつたな。」

俺も彼女から海に視線を移す。

「そ、だねえ」

「綾。」

彼女の肩をつかみ、俺に向けた。

「知夏？」

不思議そうに見つめる綾。

「好きだよ。」

それだけ言って、彼女を抱き締めた。

昼間、光に抱かれた時に付いた匂いが俺の鼻を突く。

綾は俺だけの女だ。

また、光に嫉妬して彼女を抱く手に力を入れる。

彼女を少し放す。

空はすっかり暗くなっていた。

「知夏、私も好きだよ。」

彼女は笑顔で言った。

俺は、彼女の唇と俺の唇をくっつけた。

中一のファーストキスから何回キスしてきただろう。

回数を重ねるごとに深くなっていく。

彼女への愛があふれ出てゆく。

ゆっくりと離れた。

彼女が抱きついてきた。

俺も抱き返した。

俺は、お前と一緒になら死も怖くなんてない。

「……、眠れない。」

眠れない理由は……

「スー、スー。」
綾だ。

その後、綾は俺のうちに泊まる事になり、今は同じベットの中。

俺の大好きな彼女は無防備に寝ています。

それが可愛くて／＼／＼／

(何考えいる俺！これじゃ、ただの変態だぞ！！)

自分に言い聞かせた。

それにしても、可愛すぎます。

綾は決まって右を向いて寝る。

それで俺がいるのは……

『右』

です。

反対にすれば寝ることができたのに・・・

俺は1人後悔していた。

「んー。」

私は隣で寝ている知夏を起こさないようにベットを出てきた。
そして今は、台所で背伸び。

「今日は何にしようかな？」

勝手に知夏の冷蔵庫を開けた。

あつた材料は、

わかめ、

豆腐、

あまつたカレー、

もやし、

きゃべつ、

レタス、

少しだけのベーコン

だった。

「はよ〜、いいにおい〜今日は何？」

「あ、知夏！」

知夏が髪を整えながら部屋から出てきた。

「今日は、白米とわかめと豆腐の味噌汁ともやしのマリネとカレーコロッケ。」

笑顔で言った。

「日本食にカレーコロッケはあわないと思ったけど、あまりものぽかったから。」

「たべようか？」

「うん!!！」

口にあっただか、私は知夏をじっと見つめていた。

「うま!!!!！」

「良かった。」

綾は、料理がめっちゃくちゃ得意。

プロ並みだ。

お嫁さんに欲しい。

いや、もう貰う予定だが。

「綾、久しぶり〜そしておはよう。」
校門の前で会いたくない人物が声を掛けた。

「おはよ、」
綾は笑顔で答える。

しかし、俺は睨み続けていた。

だって、ドイツとお前を合わせたくはなかったから。

バイバイ

知夏と同じぐらいの身長、
鋭い目、
金色に輝く髪。

「悠?!」(綾)

「そ、だよ。」(悠)

彼は、『櫻井 悠』知夏のいとこ。

私は小学校のころに出会った。

「何しに来た?」(知夏)

「あや姫を迎えに来た。」(悠)

2人は会ったんびにケンカをしている。いつも知夏が勝つけど・・・

「綾、会いたかった。」(悠)

「や、え!？」(綾)

悠が私に抱きついてきた。というよりしがみついてきた。

「ごめんなあ、こっちに来てからしばらく経つのに、会えなくて。」

「あ、いや・・・。」

「離れる!！」

知夏が救出してくれた。

「ああ、悠いい匂い。」

「ありがとう。」

私は悠の匂いが好き。というより、悠の香水が好き。

「悠、転校？」

「いいや、俺は海聖のナンバー1だからな。」

久しぶりに見た彼の笑顔は知夏と似ていてドキつとした。

「綾、行くぞ!!！」

「わ、あっうん。」

知夏は私の腕をつかみ、走り出した。

悠がいるってことは、あの子もいるんだよね。

放課後

「綾、先に校門行ってるぞ！あんま遅くなるなよ。」

今日は、いろいろあったみたいで午前中で授業が終わった。

空を見上げると太陽が輝いていた。

なんか、授業サボって早退した気分。

私は1人喜んでいた。

「あれ？」

いつも待ち合わせしている場所には知夏がいなかった。
知夏と代わっていたのが・・・

「綾ちゃん、ちょっと相談したい事があるんだけど。」

きしゃな体、

黒いロングの髪、

少し細い目。

日本人形みたいな女の子だった。

彼女は、『櫻井 梓』さくらい あずな悠の妹で、中学3年生。

「ここに入って。」

重さ何十トンもありそうな扉。とても大きな倉庫だった。

「誰にも聞かれたくないから。」

「うん。」

私は倉庫に1歩足を踏み入れた。

ドンッ！

「きゃあー！」

誰かに背中を押された。

誰かと言っても梓しかいないのだが・・・

『バイバイ』

彼女は一言いって扉を閉めた。

「ゴホッ！ゴホッ！」

頭上からは冷気と共に毒ガスらしきものが出てきた。

「毒ガス？」

頭がもうろうとしてきた。

そんな頭で私は必死に考えていた。

なぜ梓は私を殺そうとしているのだ？思いつく原因は・・・

『知夏』

梓は知夏が好きだから、私がいると邪魔なんだ。
そう思うと胸が痛んだ。

とにかく、ここから出ないと！！

クラッ

立つとめまいがした。どんどん頭が痛くなってくる。

(毒ガスを止めないと！！)

ふらつく足を必死に押さえた。

私は毒ガスが出ている機械を壊した。

「ハア、ハア。」

胸が締め付けられるような痛みがした。

(出ないと。)

私は全身の力を振り絞って何十トンもの扉を倒した。

・・・苦しい。

「綾？どうした！？」

「ゆ・・・う。」

私が倒れる前に悠がキャッチしてくれた。

「毒ガス？梓が？とにかく家に入ろう。」

私は体の自由が利かないから、悠に体を預けた。

「なんだよ、用って。」（知夏）

「久しぶりの再会にそれはないんじゃない？」（梓）

梓は悪魔みたいな笑みを浮かべていた。

「別に再会したくなかったけど？」（知夏）

「へえー、そういうこと言っているのかしら？あなたの大切な人がどうなってもいいのかしら？」（梓）

梓の笑みの意味はこれだったんだ！

俺の大切な人？綾しかいないじゃないか！！

「綾に何した？」（知夏）

「さあー？」（梓）

「なのが目的なんだ？」（知夏）

「あなたよ、知夏くん。お願い、私とつきあって。」
悠も関わっているに違いない。

綾は悠なんかに渡さない！！

パンツ！

勢いよく扉が開く。

「悠、お前、綾に何した？」（知夏

「俺はなんもしてねえーし。」（悠

知夏。

彼の姿を見たらたまらなく触れたくなった。

「ゆ、う、おろして？」

やっと立って知夏のもとへ歩み寄る。

（どうしたんだ？）

綾の様子が変だった。

歩き方、

声、

熱っぽい顔。

まさか！悠に?!?!

「ち、な、っ?」

私は知夏に抱きついた。

「綾、大丈夫？」

知夏は心配でたまらなかった。

「知夏、胸・・・がくるし・・・い。」

「!?!?!?」

知夏の顔がだんだん青くなっていく。

(やばい!!)

俺はいつも下げているペンダントから一粒薬を取り出した。

これを飲めば綾は助かる。

けど、もう2度と効かなくなる。

「綾、これ飲め。」

「はあ、はあ。」

苦しそうにしている彼女を見るのはすごく辛い。

「少し落ち着いたか？」

「うん、うん。」

彼女は徐々に笑顔を取り戻していく。

「梓、やっていいことと悪い事があるだろ！……！」
俺は梓を睨みつけた。

もし、綾が機械を壊していなかったら。
もし、あの場から逃げていなかったら。
そう考えるだけで怖くて壊れてしまいそう。

「ただ、脅すつもりで……。」

バンッ

知夏は机を手でたたいた。

知夏、私のせいで怒っている。ごめんね。

「俺達は薬を飲んでるから、毒とか体に回りやすいんだよ！」
私達は5歳のときに薬を飲まされた。

「ごめんなさい。」

「もう二度と近づくな！……！」
知夏はそれだけという私の腕を引いた。

「心配かけてごめんなさい。」
私は泣きながら謝った。

「バカ、お前が生きているんだからいいんだよ。
優しく微笑んでくれた。」

私はもう、貴方を失いたくない。

だいすきだよ。

命がある限り、

幸せになろうね。

月の光に照らされて

今日は修業式。

私達の学校は修業式の後に来年度の生徒会メンバーなどを発表する。

「生徒会長は、佐藤 徹さん、副会長は七瀬 綾さん、書記は・・」

え？今私の名前読んだ？！

「今年のナンバー1も藤原 知夏さん、ナンバー2は七瀬 綾さん、ナンバー3は渡辺 光さんです。」

「私、掛け持ち??!!」

なんだか大変な一年になりそうだ。

しかも、よりによって生徒会長が佐藤くんだなんて・・・。

佐藤 徹

黒縁めがね、黒の短髪、見た目はまあよしとして、

中身が・・・

かなりの変態らしい。

知夏、絶対怒るよなあ

「七瀬さん、宜しくね！」（徹

「はあー。」（綾）

私は仕方なく差し出された手に自分の手を重ねた。

「綾、行こー！」（唯）

「あ、うん！」（綾）

今日は光ちゃんの家で小さいパーティーをする。クラス全員参加で。

女子で光ちゃんの家を知っているのは私だけ。ということで私が皆を連れて行かなければならなくなってしまった。

「ここだよお。」（綾）

「わあああああ！！！！！！」（女子）

最初は皆驚く。光ちゃんの家はものすごく大きく、キレイ。

「光ちゃん、来たよ。」（綾）

「おお！！綾！！！！これ着て、頼む！！！」（光）

「はあーい」（綾）

光ちゃんに渡されたのはエプロン。つまり、私が作れということ。

「綾が作んの？」（知夏）

「うん」（綾）

知夏はエプロンを見て言った。

「楽しみにしてるな」（知夏）

知夏は微笑んだ。

私、胸が苦しい。どんどん体が熱くなっていく。

「うおおおおお！！！！これ、全部綾ちゃんを作ったの？」（男子）

「まあ。」（綾）

私を作ったのは、

サンドイッチ、

ピザ、

半熟オムライス、

ピタパン春野菜のサンド、

ローストビーフ、

ホタテとアボガドのムース、

シーフードグラタン、

春野菜のマリネ、

パンプキンスープ。

クレームブリュレ、

オレンジのプルフェググラス、

フルーツポンチ。

などなど・・・

「あーやー、ありがとう！助かった。今日、家政婦もいなくてさあ〜！」（光）

「いいえ〜、お役にたててよかったです（笑！）」（綾）

「これから、お別れパーティーin渡辺家をはじめます〜！」

（唯）

こういうことになるかと張り切る唯。

私は大勢でご飯食べるの好きじゃないけど・・・

「あ〜の、一緒に食べませんか？」（男子）

「ごめんなさい。」（綾）

私は精一杯笑顔を作った。

私は知夏と食べたいから。

気がついたら知夏がいなかった。

「光ちゃん、知夏は?!」(綾)

「例の場所。綾も行くの?」(光)

「うん」(綾)

そういうと私は会場を後にした。

一番奥の部屋。そこから外の中庭につながっている。

桜が蕾をつけて、桃の花はキレイに咲いている。

毎回来るたびに違って見える風景。

中心にある池には白い月が写っていた。

「知夏。」

知夏は池の前に置いてある白いベンチに腰をかけていた。

ゆっくりと振り返る。

彼はこの場所が大好きだった。

「綾。」

私はゆっくりと歩きだした。

そして、彼の隣に座った。

無言のまま見つめあう私達。

私はこの時間が止まっていると思うてしまっつ。

「愛してる。」

知夏が私を抱き寄せる。

「私も。」

私は大好きな彼の胸のなかで静かに目を閉じた。

「ひーかーるーくん 綾は？」（唯

「ああ、ちよつとせきはずしてゐる。」（光

「そう、じゃあ一緒に食べない？」（唯

「……。」

決して彼は無視しているわけではない。

ただ、考え込んでいるだけ。

今、行ったら知夏怒るだろうなあ。

じゃますんな！！とか言われそう。

そう思いながら内心かなり落ちこんでいた。
綾に触れたい。

けど、それは許されることではない。

せめて一緒に笑いたい。

彼女の笑顔が見ていたい。

俺は彼女が話しかけてくれて、笑ってくれるなら・・・
もうなにももらない。

・・・なんていってもそれだけじゃ不満なのに。

「知夏、もどろ。」

「もうちょっと。」

彼は私を抱く手に力を入れた。

「綾、結婚しよ。」

急に私を引き離すと頬を赤くしながら言った。

「もう少し、もう少しだから待ってて。」

「私はずっと、ずっと待ってるよ。」

うれしくて、うれしくて、涙が頬を伝った。

「もう、離さない。」

そういって、私の涙を優しく拭いた。

私の愛する知夏^{ひと}

愛する人からの言葉は、

一つ一つが重く、

温かい。

ずっと、一緒に居たいひと。

一緒に命を落とす人。

一生の愛を誓った人。

思いがどんどん溢れ出す。

太陽のゴールドリング

4月5日。

18年前、私たちがこの世に誕生した。

そして、私達は今日、18歳という年を迎えることができました。

私の目の前は真っ黒。

私はアイ・マスクを付けられ、知夏に手を引かれていた。
でも、全然不安じゃなかった。彼のリードを信じているから。

「着いた、とっつていいよ。」

「わぁ！...！」

目を開けるとまぶしくて目をつむった。

「海だあ」

真つ青な海。

白い砂浜。

青い空。

白い雲。

とてもキレイだった。

「気に入った？」

「うん」

ゴールドに光る太陽が海を照らす。

知夏が砂浜の上に座った。

私はその横に座る。

自然と2人の手は重なり合う。

私は穏やかに流れる波を静かに見ていた。

心地いい風が心をくすぐる。

流れる時間はゆっくりとそして確実に進んでいく。

さっきまで目線の先にあった太陽はどんどん昇っていく。

知夏が私を抱き寄せる。

私達の体は密着する。

「愛してるよ。昔も今もこれからずっと。」

耳元で聞こえる低い声はとても気持ちがいい。

「私も、知夏のこと、愛してるよお。」

彼が言ってくれた言葉。

彼の存在。

全てがうれしくて自然と笑みがこぼれる。

「太陽に手をかざしてごらん。」

「て、手？」

言われるがままに私は両手を太陽にかざした。

「違う、こっつだよ。」

そういつて私の左手を太陽と重ねる。

「あっ！！」

ゴールドに光る太陽。

「婚約指輪だよ。」

私の左薬指は太陽の光に照らされて光っている。

「きれいっ！！」

「太陽のゴールドリングだ。」

私は知夏が与えてくれた、

太陽のゴールドリングをずっと見つめていた。

知夏はそのまま私の手を握ると手の甲にキスをした。

そしてまた私を抱き寄せる。

「うそだよ、あれはサプライズだよ。本物はこれ！」

そいって知夏はポケットから指輪を取り出した。

シルバーのボディにきらきら輝くダイヤモンド。

「これが本当の婚約指輪だ。」

「きれっく、うれしっ!!」

知夏は私の手をとる。

そして、左の薬指にあの指輪をはめる。

「こんな高そうなのいいの？」

「ああ、あの日、中学に入学したときにプロポーズしたろ？そんな時からずっと金ためてたから、いいのが買えたんだ。」

得意げに言う知夏。

「ありがとう。」

「俺とおそろいだ。」

知夏の左薬指にも指輪がはめられていた。

「俺と結婚して下さい。」

「はいー」

私は元気よく返事をした。

今日は4月5日。

私達は18歳。

法律上で私達の結婚が認められた日だった。

私は幸せ。

今日、2つも素敵な指輪を買ったのだから。

それだけではない。

私が世界一愛している男性ひとと結婚できるのだから。

ねえ、知夏

幸せになろうね。

新たな生活

「ふはあ〜〜、しゅーりよっ!〜!」

私はダンボールに必要な荷物をつめていた。

私の家族は、お母さんしかない。

お父さんは私が生まれる前に死んでしまった。

いとこの、池澤^{いけざわ} 玲^{れい}は3歳年下の男の子。

でも、意地悪ばかりするから嫌い。

だから、私はお母さんと2人暮らしをしている。

けど、お母さんは今年再婚するみたいで・・・

邪魔だから・・・というより、私の都合により引っ越すことに。

引っ越す先は・・・知夏の家。

知夏はちょっと事情があつて1人暮らしをしているから。

「綾、終わった?」

知夏が私の部屋に入ってきた。

「うん 今終わったところ!」

これからずっと知夏と居ることができる。

と、思うとうれしくてたまらない。

「じゃ、行こっか。」

「はあーい。」

私達は引越し用の小さなトラックに乗った。

「着いた。」

「久しぶりだなあ」

「これからは毎日見るんだよ。」

「そ、だね」

知夏は家の鍵を開ける。

私はそんな知夏を見届けながら、自分の左薬指に輝く指輪を見ていた。

「ここに荷物おいていいよ。」

「あ、うん。」

言われた場所に荷物を置く。

「あれ？ベット一つ？」

「綾は嫌？」

意地悪そうに笑みを浮かべる知夏。

「嫌、じゃないけど・・・」

「じゃ、いいんじゃないん？」

「私、寝相悪いよ。」

「俺は違う意味で眠れないかも・・・」

意味が分からないから無視しよ。

「晩ご飯なにがいい？」

「なんでもいいよ。」

うっ！なんでもいいが一番大変なんだよね・・・

とりあえず、あるもので我慢しよう。

白米、

サラダ、

お味噌汁、

お刺身、ついでに自分でさばいた。

「すごっ！よくあの冷蔵庫からこんなに出てきたもんだ。」

知夏が関心する。

「ありがとう。」

綾は満面の笑みで返す。

「／／／／」

知夏は1人興奮していた。

「うまかった〜。」

「ありがとうございます〜」

私は、片付けが終わって、知夏の隣に座る。

「俺ら新婚ほやほやだよなあ〜」

「そ、だね。」

「はあ〜、明日から学校か〜。かつたりい〜」

「そういうこと言わないの。」

「はあ〜い。」

周りから見れば「バカか？」とおもつかも知れない。

けど、2人はそれが幸せだった。

世界一愛している人が生きていくという事が。

なによりの幸せだから・・・

この日の夜、私は夢を見た。

とても不思議な夢を。

私は真っ白な衣装を着ていた。

そして私が向かっているのは・・・

『バラの花壇』

私が向かっているその花壇はどこか見覚えがあった。

どこかは分からない。

けど、見たことがあった。

そこにある真っ白いベンチに1人の男性が座っている。

顔は見えないのに、自然と体が彼の所へと近づいていく。

彼の隣に座る。

彼は私を優しく抱き寄せる。

顔が見えなくて誰だかわからないのに私は幸せな気持ちだった。

だんだん視界が薄れていく。

私はゆっくりと目を閉じた。

カン違い

「皆さん、こんにちは。今日、生徒会長の佐藤君が欠席のため、変わって私、副会長の七瀬が挨拶申し上げます。

今日、皆さんが入学してくれた事を私達は深く感謝しています。皆さんの入学と共に満開に咲いた桜。優しい春の光、心地いい風、すべてが皆さんの入学を喜んでいます。

私達の学校は、人として素晴らしい人材を育てています。ただ勉強ができる、スポーツが人一倍できる。そんな事を求めているわけではありません。ここでは忘れがちな人のありがたさ、命の大切さ、そのようなことを大切に思える、心を育てています。すばらしい先生もそろっています。皆さんも私達と一緒に高校生活を満喫しましょう。失礼します。」

パチパチパチパチ

会場はすごい歓声に包まれていた。

アドリブであんなにすごい挨拶ができるなんて!!!

「さすが、綾。」

知夏は自分の大切な人がすばらしいスピーチをしたのを喜んでいた。

なんで、綾がスピーチをしていたかというところ……

会が始まる、20分前。

「やべーよ!!!」

佐藤君は1人焦っていた。

その理由が……

原稿をなくしたから。

「はぁぁあ?!」

皆が佐藤君を攻めた。

「佐藤君をせめても意味はないよ！とにかく挨拶は私が何とかするから！！」

『女神』

皆がそう思っていた。

それで、綾が挨拶をすることになった。

アドリブで……

「片倉、あの副会長！メツチャ美人だったよなあ！！！！俺……片倉と呼ばれた男は、話が終わる前に話し出した。」

「俺、あの先輩を落として見せるさ。俺の虜にしてやる。」

「はあー。」

友達はため息をついた。

「続いては、新入生代表の片倉かたくら 大和君やまとの挨拶です。」
司会者と共に進んでいく、新入生歓迎会。

「こんにちは、本日は僕たち新入生のためにありがとうございます。先ほどの先輩の挨拶にあったような生徒を目指して頑張りたいと思います。」

片倉くんは、「あの先輩」が見ていると思つて満面の笑みで挨拶をしていた。誰もが惚れてしまいそうな笑顔で・・・

「綾く、あの新入生かつこよくない？」

「うん／＼／＼」

唯の質問に適当に答えて、私は彼を見ていた。

（はあ、やっぱり知夏かつこいい。）

知夏はこの学校のナンバー1だから、この後挨拶する。

それで、ステージに待機しているのだが・・・

私は全身が熱を帯びている。

彼を見て顔を真っ赤にしている。

綾は、自然に笑顔になっていた。

けど、その笑顔が自分に向けたものだと思っている男おとこが・・・

（ふ、後少しで俺の虜だ。）

「続いては、本校ナンバー1の藤原さんに挨拶を貰もらいます。宜しくお願いします。」

知夏はゆっくりとマイクのもとへと近づく。

「皆さん、入学おめでとうございます。本校では僕の意味が絶対なので、皆さんもそれに従ってください。以上」

「ありがとうございました。」

知夏が席、というより私の隣に座った。

「最初からきつすぎない？」

「お前が甘いだけだ。」

2人にしか聞こえない声で話していた。

きつと、私達の第一印象は……

七瀬：キレイで優しい先輩

藤原：かつこよくて怖い先輩

だろう。

「おい、早速俺の虜になったみたいだ。」
片倉は得意げに言っていた。

「片倉君？だっけ？話があるんだけど・・・／＼／」

「なんですか？先輩。」

彼は余裕の笑顔で答えた。

そんな中、綾は自分の顔がまだ赤い事に気づいていた。

「あの、片倉君みたいなひとが生徒会に入ってくれるとうれしいんだけど、大丈夫？」
できるだけ笑顔で言った。

「いいですよ、先輩が喜んでくれるのなら俺は何でもします。」

（私の意志じゃなくて、先生の意思なのに・・・なんかカン違いし

てない？)

「ありがとう、じゃあこれから宜しくね……。」

「はい、宜しく願います。」

そういつて私は走り出した。

それが、片倉君は……

(照れちゃって、かわいいなあ)

そお思っていた。

「知夏~~~~~」

「ん？」

屋上で寝ていた知夏に声をかける。

「おはよ。」

「はは、おはよ。」

知夏は爆笑し始めた。

周り比べると目立ってしまう私達だけど、

二人の絆はすごく強い。

私達はそれぞれの存在に感謝していた。

人のありがたさ。

命の大切さ。

私はそれを全ての人に伝えたい。

大好きな知夏。

一生好きだよ。

カン違い(後書き)

評価お願いします!!--!!

私達が目指すもの

今、私達は屋上にいる。

知夏は私の膝の上で寝ていて、私は空を見ていた。

本当に今日はいいい天気だ。

春らしい暖かい日差し。

ゆっくりと流れている雲。
心地いい風。

全てが大好きだった。

春の日差しが私達を包み込む。

「・・・ん？」

「あ、起きた？」

「綾の膝、寝心地すごくいい。」

「なあっ／＼／＼」

「いたっ」

私は恥ずかしくて知夏の頭をどけた。
その結果、知夏は頭を床に強くぶつけた。

「あっごめん。」

そお言って私は知夏の頭をなでた。

「先生のところ、行こー!!」

「おう。」

私達は一緒に歩き出した。

「田代先生、俺達・・・」

「わぁーてる、結婚だろ!？」

田代先生は知夏が言い終わる前に言った。

「はい。」

「お前もやつと18だなあー。七瀬を頼むぞ。」

「言われなくても分かっています。」

「七瀬、幸せにな。」

「はい、ありがとうございますっ。」

笑顔で答えた。

『田代 淳先生』

私達の関係を唯一知っている先生。

すごく大雑把で大胆な先生だけど、私と知夏が大好きな先生。

普通、18で結婚は先生が反対するけど……

田代先生は、私達の命が短い事を知っているから……
応援してくれる。

先生が私達の幸せを望んでくれている。

先生、私達絶対に幸せになるからね!!

「言う前に当てられたなあ〜!!」

「そ、だね!さすが先生」

「はあ〜、でもいきなり怖すぎたかな?」

「へえ?!」

「あ、わりい!新入生歓迎会するとき。」

「ああ!少しは反省してんだあ〜。」

いやみっぽく言う。

「うっさい!!!!!」

知夏は顔を真っ赤にしていた。

「あつ!!先輩!!!案内して欲しいですが。」(片倉
片倉くんが話し掛けてきた。せつかく知夏と話していたのに……。

「え?案内?!」(綾

「はい、昇降口まで……って誰ですか、そいつ。」(片倉

「あん？」（知夏）

知夏はゆっくりと片倉くんに近づく。

その顔がかっこよくて思わず見とれる。

「先輩!!」（片倉）

「はっい？」（綾）

「なんなんですか?!」（片倉）
さっきまで余裕だった片倉くんは今はかなり動揺している。

「付き合ってるんですか？」（片倉）

「いや、付き合っではない。」（知夏）

（なあーんだ!!友達か!）

安心した片倉君だが・・・やはりカン違いしている。

「では、失礼しまあーす」

片倉君はスキップをしながら帰っていった。

「あれ？案内はいいのかな？」

「ただ、綾と話がしたかっただけだろ？」

「そんなわけないじゃん」

「アイツ、綾のこと好きだよな！けど、俺が負けるはずない！！！」

「！」
「そお言つて知夏は私を抱き寄せる。」

「そ、だよ！私は知夏一筋だから！！」

私は顔を真っ赤にしながら言う。

「俺もだよ」

私達は、真っ赤な夕日に包まれてゆく。

夕日ってはない。

少しの間にしか輝くことができない。

でも、輝いている間は誰よりも輝いている。

沈むときは呆気ないけど、

また、次の日には真っ赤に輝く。

夕日は永遠に輝き続けるんだあ！！

私はそんな夕日になりたい。

もう、呼吸ができなくなっても、

心臓が止まっても、

輝き続けたい！！

「綾、愛してる。」

「私もだよ。」

二人の愛は日に日にあふれ出していく。

命が短くなる分、愛が深まっていく。

私達は、短い間にしか輝くことができない。

けど、それと引き換えに二人の愛が永遠に続く。

息を引き取っても二人の心は永遠に離れる事がない。

夕日、

夕日あなたみたいに私達は輝いていきたい。

私達が目指すもの(後書き)

評価をお願いします!!!

危険な訪問者

「見て！見てあの人、超~~~~~かつこよくない？」

「わぁー、本当だぁ！！でも、ちょっと怖くない？」

一部の女子が外を見て騒ぎ出した。

唯が手招きをしている。

「あ……。」

外にいた人物を見てため息が出た。

「悠……。」

「え！知り合い？」

「うん、まぁ……。」

悠が私を見て微笑んだ。

「わぁ、今私のこと見て笑ったよ！！うれしい。」
私の前の女子が騒いでいた。

「それに、あの高さがやっとなのに、コントロールできないよ。」
私達は昔よく、屋上から飛び降りていた。

「すんなり降りてきたってことは・・・知夏はいないねえ！」
悠は、不気味な笑みを浮かべていた。

「そうだけど、なにか用？」

「うん、用があるから来た」
確かにそうですけれどね・・・

「実は・・・」

悠の話によると、知夏に話があるとかできたらしい。

それで、今は知夏がいる屋上に案内している最中だけど・・・

「ねえ、綾！！誰そこのイケメンは！？」
男好きの唯からです。

「んー、こういう関係かな？」
そお言って悠は私を抱き寄せた。

「違いますー！！」
私は悠を引き離した。

こんなところを知夏に見られたら大変！！

「ちえっ！」

今、舌打ちしました。これがこいつの本性です。

こんな金髪のイケメンくんが校舎に入ってきた時点でパニックだった女子は、悠の笑顔でノックアウトになっていました。

梓といい、悠といい。櫻井家は悪魔です。

「知夏！悠が来たよぉー！」

やっとの思いで屋上に着いた。

「はぁ？ゆう？」

思ったとおり、知夏は寝ていた。

「そ、なんだか話があるんだって！」

「話って何？」

昼寝をじまされて、明らかに知夏は不機嫌だ。

「わるいけど、綾、二人にしてくれる？」

「あー、うんごめんね。」

私は慌てて屋上を後にした。

屋上を出ると、温かい空気に包まれ、天国にきた気分だった。

「で、なんなの？」

いかにも不機嫌そうに言う、知夏。

「なあ、お前ら結婚したって本当か？」

さつきとはまた違く、こちらにも不機嫌そうだ。

「だから？何？」

今度は余裕の笑みの知夏。

「俺は、綾の不倫相手になっていいのかな？」

こちらは意地悪そうに微笑む。

「俺がお前に負けるはずない。」

自信満々に答える。

「へえー、自信あんだあー。」

冷やかしの目。

「あるに決まってるんだろ。」

バカにしたように鼻で笑う。

「じゃあ、勝負しよう！お前が勝ったら手は出さない。でも、俺

「が勝ったら自分がやりたいようにやるなあ。自分は負けないと思っているようにいつ。」

「後悔するぞ。」

「こちらにも負ける気はないようだ。」

「ふ、するはずない。」

「それと言って、硬い握手を交わした知夏と悠。」

「2人は屋上を後にした。」

「天使のような優しい、きれいな顔。」

「天使のように真っ白な肌。」

「俺にとって一番キレイな天使は、春の日差しに包まれて倒れていた。」

「綾!どうした?!」

屋上のすぐ近くにある階段の下に綾は倒れていた。

階段から落ちたのか!?

「ち、なつ?あれ?私・・・」

天使はゆっくりと目を開けた。

「なんだ、寝てたのか。心配したろ。」

自然と笑みがこぼれる。

「ごめんなさい、つい、気持ちくて・・・。」

天使は少し舌を出していた。

その、しぐさが可愛くて、可愛くて//////。

「そうだ、悠と勝負することになったから。」

「え!?!」

一瞬にして顔が明るくなった。

「私、絶対勝つからね。知夏のために!」
笑顔がまぶしい。

「悪い！俺と悠だけなんだ。」
申し訳なさそうに言う。

「なあーんだあ。つまんなーい……。でも、知夏のかっこいい所、見られるからいいや」

綾は少し恥ずかしそうに言った。

「ごめんな。」

綾の頭をなでる。優しく、優しく。

「ううん。」

綾、俺絶対負けないから。

悠のことだから、綾に何するかわからない。

絶対に、勝って認めさせるんだ。

俺と綾の結婚を……

綾の温もりを感じながら目を覚ました。

隣をみると、綾は気持ちよさそうに寝ていた。

それをみると、抱き締めたくなった。

しかし、それはおさえて……

今日は雲、一つない快空だった。

決戦のとき。

俺は綾を起こさないようにして、家を後にした。

危険な訪問者（後書き）

綾ちゃんをかけたバトルが始まります。

守るものと奪うものどっちが勝利するのでしょうか。

評価、お願いします。

守るものVS奪うもの

「おっそーい、逃げたかと思った。」
悠は意地悪く言った。

「わりーな、綾が離れなくて。」
いやみっぽく言う。

悠の顔は曇っていった。

「早く、済ませよーぜ。」
そう言っつて、着ていた上着を脱ぐ。

「そーうだな・・・。」
悠はさびしそうだった。

「ん・・・。」
目が覚めると、隣に知夏はいなかった。

「どこ行っちゃったのかな？」
コンビニにでもいったのかと、思い、食事の準備を始めた。

朝ごはんを食べて、片付けもして・・・でも、知夏は帰ってこなかった。

さっき、ケータイに連絡をしたら家の中で音楽が流れてきた。

だんだん心配になってきた。

(どおーしたんだろ・・・大丈夫かなあ?)

「もう、かえっていいか？」
呆れたように知夏が言った。

「まだ、まだ・・・。」
悠はまだやる気だ。

「いい加減にしるよ・・・。」

(ケータイ忘れてきたし、綾心配してるよ・・・)

「あ・・・やを、おまえ・・・から、奪うん・・・だあ・・・。」
完全に疲れている。

さすがに相手が悠ということもあって、少し苦戦した知夏。

けど、知夏は無傷だった。

ぼろぼろの悠は、まだあきらめない。

「綾は、俺が守る。」

冷たく睨みつけた。

「俺が、うば……う。」

そんなんで綾を俺から奪えるかよ！と、思う知夏だった。

あれから、2時間がたっていた。

「知夏うー！ー！ー！ー！ー！」

部屋着のままの綾。

「「あや……。」」

知夏と悠の声が重なる。

「はあ、こんなところにいた！心配したんだよおー！ー！
そう言っつて、しがみついてくる綾。」

「ごめんな……。」

必死の思いで綾を引き離す俺。

「でも、俺は男だから。」
悠を見ると苦笑していた。

綾もそれを悟ったようで、静かに頷くとその場に座った。

「あや、幸せになれよな……。」
「そういい残して、悠は去っていった。
その背中が寂しそうで綾は胸が痛んだ。」

結局、知夏は綾が来てからレベルアップした。

「綾、早く帰ろう！」
知夏は綾の腰に手を回して、歩きだした。

「あ、うん。」
少し頬を赤くしている。

「そんなかつこで歩かれても困る。」
綾には聞こえない声でつぶやいた。

普通の女ひとが着たら、ただの寝起ひきき。
って感じなのに、綾が着るとすごく色っぽく見える。

道を歩く度に振り向く男共。

すごくいらいらする知夏は、綾の腰に回す手に力を入れた。

「ん？なぁーに？」

無邪気に微笑む綾に見とれる。

「んーでもねえ／＼／＼」

真っ赤になった顔を隠すために反対を向く。

家に帰ると綾が朝ごはんを作ってくれていた。

それがすごくおいしくて・・・

(俺の嫁って、完璧すぎる!!！)

一人にやける俺。

変態じゃないか!!！

綾を守ることができてよかった。

正直、不安だった。

悠が自身満々だったから！

アイツは本気で綾を俺から奪おうとしていた。

綾は絶対にわたさない。

守るものVS奪うもの(後書き)

はたから見れば、バカップルですよねえ!!

綾ちゃんは知夏くんを、

知夏くんは綾ちゃんを・・・愛していますから。

暖かい目で見守ってください。

評価お願いします。

幸運をもたらす雨

ざあざあと音を立てて降り続けている雨。

朝は晴れていたのに、昼間から降り続いていた雨。

後ろも席に寝ている知夏を見る。

雨で屋上にも行けず、教室でおとなしくしているのだ。

「七瀬、これ解いてみる!」

授業を聞いてないことに気づいた先生が私を指した。

私が一番苦手な英語。

「えっと、これはこうで……。」

「いいですかあ?」

無邪気な笑顔。

「せ、正解だノノノ。」

そんな笑顔に頬を赤くする先生。

「すげえええ!!!さすが!!!」

誰も解くことができなかった問題を、授業を聞いてなかった人物が答えた。

誰もがすごいと思うだろう。

「ふう。」

小さい息を吐いて席に着く。

静かな教室。雨の音が耳に残る。
雨の匂い。

湿度が高いせいもあって、体を湿しめらす。

自分の体温が低くなっていく。

「きれ……い……。」

光が思わず口に出してしまった。

窓の外を眺めている女性。

目を細めて、見つめている。

すごく、綺麗だ。

「あんま、見ないでくれる？」
知夏が睨む。

「いいだろ、手出してる訳じゃないんだから…。」
大きいため息をした。

「七瀬さん、さようなら。」

「うん、ばいばい。」

挨拶してきた男子に小さく手を振る。

「はあ、強くなってる…。」
雨が強くなってきたことに、落ち込む。

「綾、帰ろ。」
やさしい笑顔の知夏。

「でも、傘ないよお…。」
下を向く。

「いいじゃん、早く帰れば大丈夫!!」
そう言っつて、片手を差し出す、知夏。

「うん。」

二人は寄り添って、外に出た。

濡れているから、バスに乗ることを避けた。

「綾、これ着ろ。」

知夏は私の目を見ないで上着を渡す。

「大丈夫、寒くないよお。」

知夏の行為を拒否した。

「お、俺がやだから！シャツが透けてる。」
そう言っつて、シャツを指差す。

「あ…。」

顔を真っ赤にして、服を着た。

「暖めてあげる？」

そう言っつて私を抱き締める。

「あたかあーい。」

私は、抱きしめ返す。

彼は彼女を必死に、守ろうとする。

彼女はそれに答えるように、行動する。

二人そろえば「無敵」誰も思うこと。

最強の知夏をとめることができるのは、最強の綾だけ。

女って、強いとだめ？

よく、綾が口づさむこと。

女は男に守られてねばいいの？

これも口癖。

私はやだよ！

守られているだけじゃ、やだ。

自分で戦いたい。

そう思うのはいけない事かな？

綾の思いも知夏はわかっている。

でも、男にすれば、守ってあげたいのだ。

「ごめんね…私のせいで寒かったでしょ？」
少し困ったような顔。

「大丈夫…だよお!!」
可愛くて、ぎこちない笑顔になってしまった。

「本当？」

(ちよ、直視できない・・・！)

知夏のやさしさを改めて感じて、雨もいいなあーと思った綾。

綾の可愛い笑顔に改めて、ドキドキする知夏。

愛しい思い

七瀬 綾。

これが彼女の名前。

俺の好きな人。

彼女をはじめて見たのは、中学1年生の時だった。

「なあ、知ってるか？俺らと同じ学年で、めっちゃきれいで、スタイル良くて、頭良くて、運動できて、性格がいい完璧な女子がいるの！」

友達が言った。

「知んねえー、てか女とか興味ねえし……。」

「たつく、春輝ありえねえーよお前！興味ねえって。」

そう、俺は女なんかに興味なんてなかった。

真っ白に透き通った肌。
くりくりとした大きい目。
小さめの口。
肩ぐらいの長さの明るい茶色の髪。
すらりと延びた長い手足。

俺は、初めてあんなに綺麗な中学生を見た。

でも、所詮「女」

男は見た目に騙されて、振り回される。

俺の親父がそうだった。

今の母親は4人目だった。

綺麗な女に惑わされ、騙され浮気を続けていた。

俺はそんな男だけにはなりたくなかった。

だから、恋なんてしない。

けれど……………。

彼女は、

自分を気取ったりなんかしなかった。

自分をもっているなんて思っていなかった。

い。
それどころか、あんなに綺麗なのにいままで彼氏がいたことがな

そんな彼女に興味をもった。

ただし、少しだけ。

「体育祭とか、興味ないし！」
クラスの女子が騒いでいた。

「興味ないとか、言わない！！運動すると楽しいんだよ。」

クラスの女子の全員が批判していると思っていた。

けど、彼女はそうではなかった。

「でも…私、運動できないんです…。」
一人の女子がいった。

「無理って言ったたら、なんもできないよ！ねえー」
彼女は隣でずっと見つめていた男子に問いかける。

「ふ…。」
その男子は急に笑い出した。

「綾さんは何でもできるからいいですよね。」
さっきの女子が言った。

その瞬間、彼女と男の眉が中央に寄つたのを俺は見逃さなかった。

「私だって、何でもできるわけじゃないよ…。」
そういって、空を見つめていた。

「はは、綾は…。」
男子はそこまで言うと、口に手をあてて笑い出した。

「わぁー！ー！ー！知夏ひどーい！笑ってるうー！ー！ー！」
彼女はいかにも不機嫌そうに呟いて、口を尖らしていた。

可愛い。

自分がどんどん彼女に惚れていくのがわかった。

彼女は、「七瀬 綾」

男子は、「藤原 知夏」

学校で一番有名な人物。

彼女は学校一綺麗だから…ということもあるが、

あの男子は、みんなから怖がられていた。

クラスのやつらが話しても…、

「ああ？」

とか、

「ん。」

とか、

「ああ……」

とか、

しか答えなかった。

口数は少なくつても、答えるときの目つきが危ない。

話しかけるな……！

いつているようだ。

「あの、これ、お願いします……。」
プリントを渡すにも勇気がいる。

「……。」

なにも言わずにプリントを奪い取る。
そして、睨む。

「いつて……！」

クラス中に響き渡った。

「綾、何すんだよ……！」

彼女、綾さんが知夏さんの頭をたたいた。

「言ったでしょ、目つき怖いつて……！治すって言ったじゃない！」

「！」
軽く舌を出して言っていた。

「ちっ！」

知夏さんは舌打ちをして、出て行った。

「ごめんねえ、あとで言うておくから。」
そういって、綾さんも教室をあとにした。

学校で、唯一知夏さんを黙らせることができる人物…

それが綾さんだった。

あの日、知夏さんがなくなったと連絡が回っていた日…

綾さんを見かけた。

でも、様子がおかしくて…

『泣いていた』

そう、彼女は泣いていたんだ。

初めて見た。

俺が知っている彼女は、

いつも笑っていて、強気で、勝気で、男みたいなさわやかだった。

なのに…

泣いていた。

ずっとそのことが気になっていて、その日以来、綾さんは行方不明だし…

だから俺は、うわさが流れたとき思わず家を飛び出していた。

うわさだから、嘘かもしれない。

でも、それでも良かった。

やっぱり俺は彼女に恋してしまった。

愛しい思い（後書き）

一週間ぶりです。

このごろ忙しくて…更新がなかなかできません！（はぁー）

打ち合わせ…

廊下は騒がしかった。

「な、何してんですか？あなたは。」

片倉は、騒ぎの原因の種である人物に問いかける。

「何って、歩いてんだけど？」

言われてみればそうだ。

「そ、そうじゃなくて…なんで他校のあなたがここにいるのか聞いているんです。」

片倉は少々びびり気味だ。

それも無理はないだろう。

金髪に輝く髪、

知夏と同じぐらいの身長、

睨みつける鋭い目、

彼の後ろには柄の悪い男共。

そいつは、『櫻井 悠』本人だった。

「あ…、いや、三年の七瀬綾に会いに来た。」
悠は片倉に話しかけた。

「会いにつて、駄目に決まってるじゃないですか！！勝手に会ったりしないでください。」

（俺の彼女にするのに…あと少しなんだから、じゃましないでくれ！！）

またもやカン違いをしている片倉君。

「はあ？つて、綾！！！！」
悠の目線の先には、目的の人物…綾がいた。

「悠、あんたまた騒ぎを起こして…。」
呆れたように言う。

「知んねえーし…こいつらが勝手に騒いでるんだよ。」

「はあ…。」

あんな悠を見て騒がない人はそうはいないだろう。

「で、用って何？」

綾の後ろから顔を出したのは知夏。

「ああ…、そうだ。」

思い出したかのように手たたく。

その三人の様子を機嫌悪そうに見ているやつがいる。

それが…『片倉 大和』だった。

「ん、で…なんで俺に言うんだ？こう言う事は生徒会長の佐藤じゃないか？」

生徒会室にて、ミーティング中の私たち。

「ああ、けど、怖がってまともな話し合いにならないだろう。たしかに…悠が言ったこと全てを受け入れるだろう。」

「悠、柄悪いもんねえー。」
優しいく微笑む。

「るせー、お前らだつてそうだろ!？」
顔を赤くして言う。

「知夏だけだよ!！」

とびきりの笑顔を知夏にむける。

悠からの話はこうだった。

私たちの高校と悠の高校では毎年、学校対抗の球技大会を行っている。

そ・れ・で、話し合いをするために来たのだ。

今年の種目は……

男子

- ・ サッカー
- ・ バスケ
- ・ 野球
- ・ ドッチボール

女子

- ・ バレー

- ・バドミントン
- ・ソフト
- ・ドッチボール

に、決まった。

部活動に関係なく、好きな種目に出ることができると。

球技大会と言っても、交流試合だから勝敗は関係ない。

私と知夏は、全種目出る事になるだろう。

楽しもう。

打ち合わせ…(後書き)

評価お願いします

勝利の女神

球技大会当日

「よおーし、今日は全勝めぞすよおー」

『おおおおおー……!』

綾の掛け声と共に、皆の気持ちが団結した。

男子サッカー

「ゴーーーーー……ル……!」

今は男子のサッカーが行われている。

「またもや、藤原選手！……3点目です。」

会場はすごい歓声と熱気に包まれていた。

知夏は持ち前の運動神経で、全てのスポーツを完璧にこなすことができる。

サッカーは、知夏の活躍もあって、8 - 2で勝った。

そのうちの、5点が知夏の得点だ

女子のバレー

「入ったあ—————！！！！七瀬選手を止めることはできません！！！」

こちらは、女子のバレーだ。

「V」

綾がチームの皆にVサインを送る。

「綾ーーーーー！！ナイスウー」
チームの皆が綾を囲む。

綾の笑顔に見とれる男共。

綾も持ち前の運動神経を発揮していた。

バレーは、3チームあった。

3勝0敗で、私たちの勝ち。

男子バスケ

「いいねえー。」
悠は一人、にやけていた。

「櫻井さん、な、なんですか？」
悠の声で周りの連中が反応する。

「いや、こっちの話……」

悠は綾の活躍に、にやけていたのだ。

(て、知夏はバスケじゃないのかよ…)

知夏の勝負を楽しみにしていたから、残念に感じていた。

「ゲーム終了!!!海聖高校の勝利!!!!!!」

バスケは、悠の活躍で海聖が勝ってしまった。

これで、私たちは全勝できなくなった。

「悠、見たたよお!おめでとっ!!!」
優しく微笑む。

「ありがと、でもそちらさんも大活躍でしたね!!!」
にっこりと微笑む悠。

「それは、どおーも。」

私は、小さく手をかざして去っていった。

観客席へと吸い込まれていく。

自然と笑みがこぼれていった。

女子ソフト

「うっ！！！！！」

カキーン

「さよならホームランじゃあーん さあっすが、綾。」

綾のホームランで、コールド勝ち。

「お疲れ！！」

そう言って、知夏はタオルとドリンクを渡してくれた。

「ありがとう。」

彼と過ごす一瞬、一瞬が幸せに感じる。

「行こっか。」

「うん」

私と知夏は一緒に次の会場へと向かった。

男女ドッチボール

「うっわぁー、綾、怖！……！」

光が女子の試合を見ながら呟く。

「いいじゃん。」

知夏は得意げに微笑んでいた。

ビューーーーーーーという、風の音が聞こえるほどに早いボールを投げている。

一切、容赦よこしまなしだ。

「完全燃焼…。」

光るが苦笑いしながら言った。

「たしかにそうだな。」

結局、6勝2敗という結果で終わった。

最強の二人が出ていない、バスケとバトミントン以外は圧勝だった。

が、二人のいないのは、負けてしまった。

そのことから、綾と知夏は、

『勝利の女神』

と言われた。

綾は女だから、「女神」でいいが、

知夏は男だから、「神」じゃない？という声も少々あったが、皆お構いなした。

2人揃えば『最強』

この言葉に嘘なんてなかった。

すべてのスポーツを完璧にこなす。

学校の平均点を上で引張る。

けんかをすれば絶対に負けない。

完璧な人って、あの二人を言うのだろう。

けれど…

2人は、ひとつだけ勝てないものがある。

それは・・・

『命が短い事』

それでも2人は…

勝利の女神（後書き）

番外編で「真実」を書かせていただきました。

もし、よろしければ…読んでください！！

感想、評価、お待ちしています。

最後の別れ

19歳の春。

私たちの残された人生はあとわずか・・・。

これまで必死に生きてきた。

私たちは高校を卒業しても高校に行っていた。

自分の命を…死を無駄にしたくなかったから。

だから、私は後輩たちに料理を教えていた。
知夏は私についてくるだけ。

それでも私はうれしかった。

彼の存在が…

私たちの誕生日は明日…

明日で私たちは、

『20歳』

になってしまふ。

残された人生はあと2日。

今日は、光ちゃん主催の誕生パーティーがある。

光ちゃんはあ・え・て、一日前にしてくれた。
これは、私たちが思ってた…。

「知夏、行こっか」
彼に声をかける。

「ああ……」

私たちは渡辺家に向かった。

パーティー会場に着くと大勢の人でにぎわっていた。

「おお！！主役登場じゃん！！」

光ちゃんも私たちを一番奥の部屋に誘導した。

私たちの過去を知る人物はほんのわずか……

ここにいる、ほとんどの人が知らないのだ……

皆とは今日でお別れ……そう思うと目の奥が熱くなった。

司会の進行と共に進んでいく会……

今は、食事の時間だ。

私と知夏は、皆に挨拶……最後の別れをしようとしていた。

きしゃな体、
黒いロングの髪、
少し細い目。

日本人形みたいな女の子だった。

「梓ちゃん…、来てくれたんだね。」

「綾ちゃん…！！ごっごめんさい！！！！」
梓の目からは涙が溢れていた。

「本当に、本当に、ご…めんなさい。」
どんどん涙が溢れ出ている。

「あやまらない…？大丈夫だから…」
なだめるように、言い聞かせるように言う。

今日は泣かないって、決めていたのに…泣きそつ…

「いままで、ありがとう…そして、幸せにね……」
梓は私と知夏を交互に見つめていた。

男にしては長い「茶色い髪」。
耳にはピアス。
顔は普通にイケメン系だけど、
目は切れ長く、真っ黒だった。

「綾…さん」

「城崎、春輝…」

そのまま沈黙が続く…

「いろいろ、ありがとう…助けてくれて…」
私が先に沈黙を破る。

「…」

春輝は下を見たまま黙っている。

「あなたが…、春輝がいたから私…」
そこからさきの言葉が詰まる。

「ちよっ…!!」

春輝が私を抱きしめる。

「俺、ずっと、初めて見たときから綾さんのこと…好きでした…」
そう言って、私をゆっくりと放す…

「…」

今度は私が下を向く。

「行くぞ!!」

後ろにいた知夏が私の腕を引く。

その手の強さから、知夏が怒っていることが分かる。

ありがとう。

知夏に手を引かれながら、呟いた…

知夏と同じぐらいの身長、

鋭い目、

金色に輝く髪。

「悠…」

悠は、ゆっくりと私たちに近づいてくる…

いつもの優しいまなざし…

でも、今日は少し違った。

「綾……」

しばらく見つめ合っていた。

「幸せにな……」

悠は頬笑んだ……。

そして、私から知夏に視線を移す。

「うん」

「ああ」

二人の言葉が重なる。

また、しばらく悠と見つめ合った……

「じゃあ……なあ……」

ゆっくりと悠は歩き出した。

私はその背中に向かって言った。

ありがとう……

と……。これまでの気持ちを込めて……

一筋、私の涙が頬を伝って落ちていった。

私と同じくらいの明るい茶色い髪、
あいかわらずきちんとした服装…、
男にしては可愛らしい整った顔…。

「こ…う、ちゃ…ん。」

光の顔を見たら、溜まっていた涙が溢れ出てきた…

「泣くなよ…、綾…」

光は私の涙を優しく拭く。

「ありがとう、今まで、本当にありがとう。」

光の顔をまっすぐ見つめ、できるだけ笑顔で言った。

「こっちこそ、ありがとうなあー」

光は、いつもと変わらない笑顔で微笑んでいた。

その笑顔が私たちを安心させる。

「光…、ありがとう」

ずっと、黙っていた知夏が口を開く。

「ああ、綾を頼んだぞ」

「分かってるよ……」

二人は固い握手を交わしていた。

「じゃあね」

「じゃあな」

二人の姿が見えなくなったのを確認して、光は一人、泣いていた。

彼らには涙を見せたくなかったから……。

皆、いままでありがとう……

支えてくれて……ありがとう

私たちの分まで長く生きて下さい。

私は、空から、知夏と一緒に見ているから…

幸せに生きて下さい…

私は、皆と会えて…、知夏と会えて幸せでした

ありがとう

最後の別れ（後書き）

ラスト2話です…

がんばれ自分！！

明日、あさつてと更新したいと思います。

評価、感想お願いします

迫る死

私は、真っ白なワンピースを着ていた。

今日は、4月5日。

私たちは、20歳になってしまった。

今日がこの世で二人っきりで過ごす最後…

「綾ー、行こっか！」

知夏が私の手を握る。

「あ、うん」

私も握り返した。

午前中は、海でデートをすることになった。

「わあー！！いつ見ても海は綺麗だねえー」

今日は快晴だった。

雲ひとつない真つ青な空、
太陽に照らされてきらきら光る海、
心地いい春の風。

「最後にここに来れてよかったあー」
握っていた手を宙に上げる。

「思い出いっぱいあったからなあー」
宙に上げていた手を自分の胸に引き寄せる。

「きゃっ」

綾が小さな悲鳴を出した。

「愛してるっ」

そう言って、自分の唇と綾の唇を重ねる。

長い間こうしていた。

ゆっくりと唇を離す。

ずっと、見詰め合う。

「も、いっかい！」

そう言っつて、もう一回唇に吸い付く。

「んー／＼／」

さっきよりも激しくなる。

俺は、綾と一緒に過ごすことができ、会えてよかった。

「なあーに？なんかついてるう？」

綾が自分の顔を手で覆う。

「ついてない…、ただ見てるだけ」

綾の手をとる。

そして、強く握る。

太陽が真上に昇る

真っ青な海。

白い砂浜。

青い空。

白い雲。

目を瞑れば懐かしい思い出がよみがえる。

「太陽に手をかざしてごらん。」

「で、手？」

言われるがままに私は両手を太陽にかざした。

「違う、こつだよ。」

そういつて私の左手を太陽と重ねる。

「あつ！！」

ゴールドに光る太陽。

「婚約指輪だよ。」

私の左薬指は太陽の光に照らされて光っている。

「太陽のゴールドリングだ。」

あの時、2つの婚約指輪をもらったのもこの海だった。

プロポーズされたのも、この海が見える場所だった。

「知夏、いろいろ、ありがとうね」

知夏の顔を見つめながら微笑む。

「こっちこそ」

知夏も微笑み返す。

真っ赤に輝く太陽。

さっきまで真っ青だった海はオレンジ色に光輝く。

真っ青な空も赤く染まっていた。

隣にいる知夏の顔もオレンジ色に染まっていた。

心地いい風が心をくすぐる。

触れ合う二人の体温が伝わりあう。

自然と握っていた手に力が入る。

日が沈む。

太陽が沈む…

穏やかに流れる波を静かに見つめる。

時間はゆっくりと、そして、確実に流れていく。

愛する彼が私を抱き寄せる。

二人の体は密着する。

日は完全に沈んでいた。

太陽の姿は消え、その代わりに月が姿を出す。

月の淡い光が私たちを包み込む。

一番星…

ひとつだけ星が光っていた。

私たちはゆっくりと立ち上がった。

海を背に二人は歩き出す。

さようなら…

私たちは海に別れを告げた。

ゆっくりと、そして、確実に私たちの死が近づいてくる。

綺麗な涙が落ちてゆく。

迫る死（後書き）

ラスト1です！！

明日更新予定。

評価、感想お願いします

永遠に…

私たちが向かっている先…

それは…

『薔薇の花壇』

花壇の薔薇を見つめていると、知夏は先にベンチに座っていた。

『真っ白なベンチ』

私は彼の隣に座る…

彼は私を優しく抱きしめる。

死が近づいているというのに私は幸せだった。

何でだろう？

それはきっと、彼…知夏がいるからかなあ？

「ち…なつ？」

彼の肩に頭を乗せる。

彼は優しく私の頭を撫でた。

そして…

「あや…」

優しく微笑む。

私も優しく微笑み返す。

二人は抱きしめあう。

白い、淡い月の光が二人を包みこむ。

すっかり冷え切った体が、徐々に温まる。

「俺、お前に会えて…過ごせてよかった。ありがとうな」
彼が優しく微笑む。

それを見たら溜まっていた涙が溢れ出した。

「私も…、幸せ」

溢れる涙は止まることを知らない。

命が短くなる分、愛は深まっていく。

二人の存在が一番の宝…

命の長さなんて関係ない。

私たちは人より少し命が短いだけ。

それでも、私たちには大切な人がいる。

守りたい人がいる。

だから、がんばれる。

だから、幸せ…

息ができなくなっても、

心臓が止まっても、

二人の思いは永遠に動き続ける。

私たちは、一生分の愛を得ることができた。

これもすべて神様のおかげ…

ありがとう。

「ずっと一緒だ…」

耳元でささやく。

「うん、ずっと、永遠に一緒だよっ」

涙を流しながら微笑む。

この涙はつれし泣き。

涙は悲しいときだけ流れるというのは嘘…

本当につれしいとき、幸せのときに綺麗な涙がでる。

涙の流れた分まで幸せになれる。

私たちは強く手を握っていた。

私は知夏の肩に頭をのせる。

知夏はその上に頭をのせた。

もうすぐ明日になろうとしていた。

ありがとう。

知夏と出合わせてくれて。

ありがとう。

皆と過すことができて。

ありがとう。

命をくれて…

私はたくさん感謝をした。

神様…

私は幸せです。

大好きな人と死ぬことができて…

愛してる人と死ぬことができて…

私は愛されている…

彼に愛されている。

私はこれで十分です。

私たちはゆっくりと目を閉じた。

これから長い眠りにつく。

永遠に…

眠り続ける。

私たちは、永遠に愛し続ける。

永遠に…

行き続けるんだ…

永遠に…

愛し続ける。

私たちの心臓はゆっくりと、止まった。

END

永遠に…（後書き）

完結です。長かったですねえー！！

「最愛なる友人へ」という、手紙も書きます。
もしよろしければ読んで下さい。

いままで読んでくれた方々、誠にありがとうございます。これからも、桜井をお願いします。

＜番外編＞最愛なる友人へ（前書き）

これは、綾が友人、光と唯に宛てた手紙です。

<番外編>最愛なる友人へ

光ちゃんへ

光ちゃんがこの手紙を読むときにはもう、私たちは居ないと思います…。
いっぱい迷惑かけてごめんなさい。でも、光ちゃんがいてくれたから、私も
知夏も幸せに過ごすことができました。本当にありがとう。

私たちは一緒に遠い世界に行きます。そこがどこかは分かりません。でも
もきつと、誰も行ったことのないところ…。それでも私は幸せです。
一人じゃないから。

これから光ちゃんは、自分の人生を楽しんで下さい。私たちはいつまでも
見守っています。いい恋してね(笑)

それと、唯をお願いします。唯は少し男好きだけれど、光ちゃん
のことは

『特別』だから…。だから、もしよければ、恋人になってあげて？

こんな話

私がしているのかわからないけど…とにかくお願いします。

最後に、もうひとつの手紙を唯に渡してください。

光ちゃん、幸せにねえ

それと、ありがとう

綾・知夏より

唯へ

唯、唯がこの手紙を読んでいるころには私はもうこの世に居ない
と思います

す。できれば笑って、笑顔で読んでほしいです。

私は唯に内緒にしていたことがいくつかあります。今日はそのことを話そうと思っています。

私は、『20歳』までしか生きることができません。病気というわけではないのですが、昔、推さないとき20歳までしか生きられない薬を飲まされてしまいました。知夏も一緒です。それで、昨日、4月5日私たちは20歳になってしまいました。だから…私たちは遠くへ行きました。

でも、私は自分の人生が『不幸』だとか、『可哀そう』だとか思ったことは一度もありません。むしろ、幸せだと思います。私と知夏は皆より少し命が短いだけ。でも、その分愛は深まっていきました。

私は、短い命と引き換えに

一生分の愛を得ました。

だから、幸せです。

もうひとつ、秘密にしていたことがあります。それは、知夏との関係につ

いてです。

じつは私たち、18で結婚してました。

私が13歳、中学1年生のときにプロポーズを受け、18になつてようやく結婚しました。

いろいろと秘密が多くてごめんなさい。

唯、幸せになつてね。

光ちゃんと仲良くしてね。

またね。

藤原 綾（七瀬 綾）より

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2242g/>

永遠に

2010年10月9日18時19分発行